

特集：「持続可能な開発目標（SDGs）」の視点をふまえた教育実践 ESD用地域副読本を活用した教師教育実践

伊藤 裕 康
(文教大学教育学部)

Practical Research on Teacher Education based on Utilization of Local
Textbooks for ESD

ITO HIROYASU
(Faculty of Education, Bunkyo University)

要 旨

教員には深いESD理解が求められる。教員の深いESD理解を生む手だての一つとして、教職志望学生のESD理解の深まりを挙げたい。本稿では、香川大学教育学部の2019年度前期「社会科授業研究Ⅰ」（3・4年生前期履修）において、大学院生が開発したESD用地域副読本をテキストにして授業開発を行ない、香川大学教育学部附属坂出中学校の1年生3クラスで行なった飛び込み授業とその後の動きを報告する。

1 はじめに

教員は、多忙な上、社会の変化で新たな「〇〇教育」の実施要請が来る。「〇〇教育」の理解も大変なのに実践まで、「勘弁して」が本音だろう。ESDも、「E, SORE, DONNAKOTO」状態から脱したとしても、ESDの「意味」を理解して実践しているかは、怪しい。文部科学省や教育委員会が言うから「〇〇教育」を実践するなら、学習指導要領から消え、文部科学省や教育委員会も言わなくなれば見向きもされなくなる。実践すべき価値があるなら、情勢が変わろうと「〇〇教育」を実践すべきである。だが、時間がない学校現場は、学習指導要領から消えた後も実践するには覚悟がいる。覚悟は、「〇〇教育」への深い理解が生む。ESDは良い意味で消えれば嬉しいが、将来的に学習指導要領から消え、文部科学省や教育委員会も言わなくなことはなかろう。それだけに、教員の深いESD理解が求められる。教員の深いESD理解

を生む手だてに、教職志望学生のESD理解の深まりを挙げたい。

3・4年生の前期履修科目「社会科授業研究Ⅰ」は、全員3年生で履修し、4年生は再履修者と他学部生である。3年生は、履修直後の9月に初めての教育実習がある。社会科での実習生は他教科に比べ圧倒的に多い。大学で力をつけ附属学校に送り出さないと、附属学校の負担が増す。そこで、2003年度から「社会科授業研究Ⅰ」は模擬授業で終わらせずに、香川大学教育学部附属坂出中学校（以後附属坂出中）での飛び込み授業まで行っている。その授業を高校生用に修正し、オープンキャンパスでも授業を行う。当初、大学教員と附属教員との協働で創り上げる年間の選択社会に受講生の飛び込み授業を位置づけ実施していた。これは、大学院生が開発したESD用地域副読本を活用した飛び込み授業が始まるまで続いた。大学院生がESD用地域副読本を開発するようになったのは、教育学部

では地域学習と正対した授業がない上に、地域学習と正対した授業を行なう時間もないことが係わっている。院生は、将来の地域教育のリーダーとして嘱望されるだけに、筆者は、院生だけは地域教材開発力を育成したいと考えていた。院生も地域教材開発力をつけたがっていた。両者の思惑が一致し、平成18年度から大学の学生支援プロジェクト事業が始まり資金面での支援が見込めることから、大学院生によるESD用地域副読本開発が始まった。大学院生開発のESD用地域副読本は、2006年度から5冊開発した¹⁾。教員採用事情が好転し、ESD用地域副読本開発に携わる大学院生の人数減少というマンパワー問題と、刊行費捻出の金銭問題から、ESD用地域副読本は、2011年度を最後に開発出来ていない。

本稿は、2019年度前期「社会科授業研究Ⅰ」で、大学院生開発のESD用地域副読本をテキストにした授業開発と、附属坂出中1年生での飛び込み授業とその後の動きを報告する。

2 オープンキャンパスの授業までの「社会科授業研究Ⅰ」の活動の様子

2019年7月11日（木）、附属坂出中第1学年全学級（3クラス）で飛び込み授業を試みた。その授業を高校生用に改良し、8月7日（水）のオープンキャンパスで授業（約25分）を行なった。オープンキャンパスの授業までの経過と様子を表1にまとめた。例年「社会科授業研究Ⅰ」では、授業開きの仕方、発問や指示の仕方、板書の仕方、指導案作成方法、飛び込み授業づくりとその実施、事後のステップモーション方式の授業分析での振り返り等、授業に係わる一通りのことを演習形式で学ばせている。2019年度は、院生1名がテーチャングアシスタント（TA）として表1の⑧～⑫の授業に携わった。院生は、学部3年生時に、「社会科授業研究Ⅰ」を履修している。TAの院生には、大学教員とは違う目線での3年生への支援・指導を期待するとともに、院生自身の教授者としての成長も期待した。

表1 社会科授業研究Ⅰの学習過程

段階	実施日	学生の感想から見た授業の状況（ゴシックは筆者）
講義の方向付け 授業に係わる基本的に大切なことの教授 学習指導案の書き方・授業に係わる基本的に大切なことの教授	① 4/11木 ・授業開きの仕方（折り句で自己紹介、アイスブレーキング等） ・授業に係わる基本的なこと ・発問と指示の違いについて	・（前略）今後の授業の流れや概要をおおまかに掴むことができました。またそれに加え、授業開きをどうするかについても学びを深めることができました。その際、どういった授業開きをするのかだけではなく、指示の出し方や黒板やチョークの使用について気をつけるべきこと、また空白禁止の原則を用いて、児童・生徒の私語を減らし、こちらに興味・関心を向けさせる工夫をする等、たくさんのことを学ぶこともできました。（後略） ・具体的に授業の中でどのように児童生徒に板書をさせるかや、黒板の消し方などが分かり、とても実践的な内容だなと思った。今まで履修してきた授業では、授業の組み立て方や指導法などがメインで、授業中の細かいテクニックなどはあまり教わってこなかったのでこの授業がとても楽しみになった。
	② 4/18木 ・発問の大切さ①（拡散的発問と収束的発問等） ※がをはに替えると、こたえが変わることで、発問吟味の大切さに気づかせる。 ・指示の仕方①	・（前略）発問を考える際にはこの二つの性質を把握し、意図して考えないと授業が上手くいかないと感じました。それはこの講義の「雪がとけると何になるか」でも感じました*。もし、自分が水というこたえを出してほしいと思い作った場合、春やシミといった予想もしていないこたえが返ってきた時必ず焦ってしまいます。ですので、発問は明確に考え、こたえを十分に予測することが授業を作る上で非常に大切だと感じました。
	③ 4/25木 ・指示の仕方② 『水のパイオニアⅡ』と『水・土・里のパイオニアⅡ』等を基にしたESDの飛び込み授業の班編成	・今日の授業では飯盒の洗い方について、端的な説明の仕方を考えることをしました。前回の授業で考えた私の言い方は長くて、わかりづらい説明になっていました。端的にわかりやすく説明する力は教員採用試験の討論面接等でも重視されます。ですので、日常会話でも端的に述べられるよう気をつけます。 そのあとの、班活動では、より良い説明の仕方を自分たちの班で考えました。それにプラスして、生徒もその考えになるように授業でどのような流れで子どもたちに問いかけるのかも考えました。私たちの班で考えた説明文は、「飯盒を触った時に、中はつるつる、外はずすが手につかないように洗いなさい。（実物を持って、子どもたちに見せたり、説明の後に中を触らせたりする）」です。中も外も飯盒の汚れを取るために、見て、触って、感じて考えられるような指示にしました。特別な支援を必要とする子どももいると思うので、実物があれば、よりわかりやすい説明になると考えました。
	④ 5/9木 ・指示の仕方③（AさせたいならBと言え！） ※これは指示での原則だが、発問も有効であることを捉えさせる。 ・なぜ学習指導案を書くかー指導案に必要な項目は何か①ー	・多くの場合AさせたいならBと言うようにさせたいことをストレートに言いがちだが、Bという別の表現を用いることが発問には大切だと学んだ*。しかしこれは意識して行わないと出来るようにはならないと思うので日頃から意識しておきたいと感じた。そして学習指導案について学んだが、一番大切なのは当たり前かもしれないが子どもが学ぶ主体であるということだと思った。また子どもが大事だからといって知識を押し付けるのではなく、子ども自身が学びたい、大切だと考えて自らやろうとすることが学習であると学んだ。だからこそ教師は手持ちの引き出しや仕掛けを増やし、魅力的な授業をすることが求められると考えた。 ・今回の授業では、指導案は子どもが学ぶことを指導するためのものであることが分かった。教師が伝えたいことを教えることが学習ではなく、教師が伝えたいことを教材や伝え方を工夫して伝え、それを受けて子どもが学びたいと思い取り組むことが学習である。それを前もって考えて作成するものが学習指導案であると理解した。指導案はあくまでも案である。そのため、授業では教師が導きたい方向に持っていくというよりは、子どもの考えを重要視し、子どもが学びたい方向に持っていくことが良い授業である。
	⑤ 5/16木 ・なぜ学習指導案を書くかー指導案に必要な項目は何か②ー ・発問の大切さ②ー有田実践から知覚語で問うことを学ぶー ※社会科は、子どもをとらえた授業が大切であることに気づかせる。 ・社会科の類型	・（前略）発問する際にも間接的に問うと良いということを学んだ。また、知覚語を使うという新しい原則も学び、指導案づくりに生かしたいと思った。指導案を書く意味は、授業の軸を作っておき、児童・生徒の反応を予想することで、自分が授業のイメージをしておくため。また、公開授業の場合、参観者が事前に授業の流れを把握しておくことで参観しやすくするためではないかと考えた。 ・（前略）指導案には必ず学年と組が書かれているが、組まで指定する重要性は今まで感じていなかった。しかし、クラスによって活発であったりやや消極的であったりなどそれぞれ特徴があり同じ授業を展開することとは良くない。そのクラスの児童・生徒観を読み取りそのクラスだけの授業を作ることがおもしろい社会科を作る要因だと思った*。（後略） ・今回の授業の中で、社会科の授業について考えた。社会科であって、そして面白い授業がベストであり、もちろんそれを目指していかなければならない。ただ、最近は面白いが社会科になっていない授業も増えていることが分かった。授業をするうえでももちろん面白いに越したことはないが、社会科であることを忘れず、しっかりと公民的資質の育成につながる授業をしていきたい。（後略）

段階	実施日 授業内容と感想に 対する講義の意図	学生の感想から見た授業の状況（ゴシックは筆者）
学習指導案の書き方・授業に係わる基本的なことの教授	<p>⑥ 5 / 23 木</p> <ul style="list-style-type: none"> なぜ学習指導案を書くかー指導案に必要な項目をどの順番で書くかー ※「神は細部に宿る」ように、授業は、細々した技法が各場面で展開されて成立することに気づかせる。 ・KJ法とその留意点 ・発問の大切さ③ 	<p>学生感想から見た授業の状況（ゴシックは筆者）</p> <ul style="list-style-type: none"> ・（前略）学習指導案の項目の順番を整理する（学習指導案で書くべき項目をどの順番で書くかということ、筆者補足）という内容を通して様々なことを学んだ。その中でもKJ法の話で、同じ意見のカードを重ねるときに普段挙手が少ない子どもの意見を見えるようにするという工夫は、子どもの自己肯定感を高めるのにとっても効果的だと考えた。また、発問の際に、疑問詞をどこに置かかて子どもの反応に差ができる可能性があるということを学び、改めて指示や発問の細部にこだわることの重要性を学んだ*。 ・今回の授業で一番印象深かったことは、なぜ人を殺してはいけないのか、と、人を殺してはいけないのはなぜか、の違いについてです。こうやって、じっくり見比べてみると、やっとならぬのが現状ですが、実際教壇に立つと考える余裕はないだろうなと思います。しかも子供は自分の予想通りに動いてくれない、という状況で、間違った発問をしてしまいそうでした。それと、今日の授業で改めて、意図のない質問は本当に面白くない授業になるんだなと感じました。そうならないように指導案を作る段階で、しっかりと発問を考えないといけないと思いました。
ESD理解	<p>⑦ 5 / 30 木</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ESDとは ※香川の問題でもある水問題はESDでも重要な問題であることに気づかせる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・今回の講義ではESDを取り扱った。持続可能な開発のための教育ということで、ESDで取り上げられそうな課題について列挙していった。人口についてやテロについてなど様々なことが、水問題を考えてみると水がないと生活ができないだけでなく産業が成り立たない。水問題はあらゆる課題と繋がっている。特に香川県は水不足で話題になることがあるので身近な事として教材化すると良いと思った*。 ・今回の授業において、ESD（持続可能な開発のための教育）についての重要性を知ることができました。今まで「持続可能な開発」という言葉は環境のことを指しているのかと思っていたのですが、環境だけでなく経済や社会にも範囲が及んでおり、その3つの総合的な発展によるものということが分かりました。現在資源が有限の地球に住んでいる私たちにとってESDは今後かなり重要な考えになってくるので、きちんと学校の中で教えていくべきだと思います*。
飛び込み授業のガイダンス	<p>⑧ 6 / 6 木</p> <ul style="list-style-type: none"> ・飛び込み授業映像の視聴 ・NIEについて ※新聞も教材として活用できることに気づかせたい。 ・班ごとのテーマ決め 	<p>（TAで支援に入った院生の声）</p> <p>これまでの飛び込み授業の映像を視聴したことによって、具体的に当日の様子を掴むことが出来ていたように思われる。2年前の筆者と同様に、学部生からは「不安だ」「何から始めればよいか分からない」という声が多く聞かれた。見通しが持てているようで、持っていない。我々もそうであったが、背景としては、「授業づくり」の部分が映像からは見えにくいからだと考えられる。学部生の名前がほとんど分からず、社研の縦の繋がりの薄さを痛感…。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・NIEという単語を私は知らなかったので今回の講義で知ることができてよかった。新聞を教材として用いることで、社会性豊かな青少年の育成を目標としていると調べたら出てきたため、私も是非教材として用いたいと思った*。 ・今日グループで飛び込み授業で何を扱うかテーマを考えた。参考文献の中のテーマはどれも興味深い内容で授業が出来れば面白いだろうと考えたが、そのテーマを自分たちが扱いきれるかとても不安に感じた。テーマや題材はいろいろなものから取り上げることは出来るが、その材料を上手く調理する技量は教師次第なのだ改めて感じた。 ・今回の講義では、過去の飛び込み授業の映像を見た。生徒たちが意見を積極的に出してくれている様子が見られた。生徒たちが積極的に考えることが出来るような授業をすることが大切で、そのための準備を仲間と協力しながらしっかりと行っていかなくてはならないと感じた。

段階	実施日	授業内容と感想に対する講義の意図	学生の感想から見た授業の状況（ゴシックは筆者）
班ごとに調査・資料収集・実践化への準備、授業に係わる基本的で大切なことの確認と深化	⑨ 6 / 13 木	<p>・ 班別教材研究①</p> <p>※大学院生には、グループ学習におけるフリーライダーの問題性に気づかせたい。</p> <p>※※学生に示したデータが古いものであり、そのままでは使えないことは分っていた。自分たちで新たに新しいデータを収集し、それを活用するよう力をつけてもらいたい。</p>	<p>(TAで支援に入った院生の声)</p> <p>45分の授業をさらに前後半で分割しようとしているため、20分構成の授業を練っている段階である。短い時間で何を主とするかという点が各班定まっていない。筆者の時(院生が学部時代のこと、筆者補足)も同様であったが、前後半に分ける必要性に疑問も感じる*。(授業者を経験する者が増えるという点はメリット) 班内でも意識の差がある。どの班も、授業者決めは後回しにしたい風潮あり。資料が古いため、バイオニアシリーズの記述内容の裏どりに苦戦している模様**。</p> <p>・ 20分のできることは限られているが、生徒に学んでもらいたいことは何かと考えたとき、自分自身のESDについての勉強が足りないなど考えた。全国で行われているESDについての授業実践(ママ)について調べ、どのような授業を行なっているか知りたい。授業をする際、教師自身で実情はどうか、生徒に身近な問題で考えられることは何なのか、考えなければならぬことはたくさんあると考えた。</p> <p>・ 今回の講義は主に飛び込み授業の内容をどのようなものにして授業で扱うのかをグループで考えた。生徒がその題材について知っていたらどうしようと考えた人が自分も含めてたくさんいた。興味を引くようなテーマ決めも大事だが、既に知っている内容でも教師の腕次第で良くも悪くもなるのではないだろうか。グループで話し合いを積極的に進め少しでもよい授業ができるように頑張ろうと思う。</p> <p>・ 授業づくりにおいて、データや資料を集めるということの大切さを知ることができた。自分が授業を進めるのに必要な資料や、子どもたちが新しい発見をするために必要な資料、教材について知るための資料などさまざまな資料があった。集められるだけ集めて、その中から必要なデータや資料をピックアップすれば良いことに気づいた**。また、指導案を書いた時以上に子どもの反応の大切さを感じた。子どもの反応をよく考えないと授業がうまく組み立てられなかった。子どもの反応をうまく考えられたかどうかで授業の良さも変わってきそうに感じた。</p>
	⑩ 6 / 20 木	<p>・ 班別教材研究②</p> <p>※学生に示したデータが古いものであり、そのままでは使えないことは分っていた。自分たちで新たに新しいデータを収集し、それを活用するよう力をつけてもらいたい。</p>	<p>(TAで支援に入った院生の声)</p> <p>班による進度の差が見られる。日程的にも付け焼刃の授業づくりになってしまいそうな予感。同時に、TAとしての関わり方に悩む。「授業づくり」の力を育む(自分自身も含めて)ということを経験するとこちらの作ったものを押し付けてしまっはいけないと思いつつも、安易にいろいろと言ってしまった。</p> <p>・ ほぼ20分ないだろう授業時間で、子どもに何を伝えられるだろうということを考えるのは楽しかったけど、難しかったです。これからもう少し時間はあるのでさらに練習していきたいと思つきます。</p> <p>授業内容は、導入として、かけうどん1杯作るのに生じるうどんの茹で汁を見せ、「これはなんの水だと思う」と問いかけます。うどんの茹で汁であることを示します。このような水の汚染の問題は現在進行形であり、香川県の観光産業が発達し、うどんの消費量も増えたことで、茹で汁の問題は深刻であることを伝えます。しかしうどんは香川の名産品であり、私たちの食生活と切り離せない存在であるため、うどんのある食生活と環境の改善を両立させる方法はないか、どうすればうどん産業は環境にもっと優しくなれるかという問題意識を共有します。</p> <p>・ 6/20の授業では、グループごとに授業の進め方について話し合った。1組のAでは、うどん排水の対策の現状を知るためにうどん屋にインタビューをして、現場では排水対策がどのように行われているか調べることになった。その際に、チェーン店と小規模のお店ではどのような違いがあるかや、排水処理のための設備投資の負担がお店にどれくらい負担になっているかなど、聞きたいことをまとめて、なるべく早く訪れたい*。</p> <p>・ うどんの汁の水汚染について、授業をすることは難しいなど考えました。なぜなら、資料も古かったり少なかったりするからです。しかし、そんな中で、なにを生徒が学ぶことができるのかと考えると、20分という限られた時間をより有効に使いたいと考えました。資料を集めて、事実をしっかりと確認することが大事だと思つきました*。</p>

段階	実施日 授業内容と感想に 対する講義の意図	学生の感想から見た授業の状況（ゴシックは筆者）
力ある教師の授業の分析ビデオ視聴による既習事項の振り返りと新たな授業技法及び質的授業分析の習得	<p>⑪ 6 / 27 木</p> <p>・ ストップモーション方式による漆間先生の授業分析の映像視聴①</p> <p>※授業分析の仕方の習得に加え、漆間氏が、講義中に示した授業技法を駆使していることに気づかせつつ、受講生が行う20分という時間でもしっかりと授業が作れることを実感させることをねらった。</p> <p>・ 班別教材研究③</p> <p>※※力のある教師である漆間氏の授業に対する姿勢から、どのような学び方をすればいいのか考えさせたい。</p>	<p>(TAで支援に入った院生の声)</p> <p>まだ、授業の大枠も決まっていない班もあり、2年前と比較しながら(院生自身が学部時代に受講した時と比べて、筆者)少し焦る。授業者も決まっていない。3班に分かれているが、実質6班に分かれている状態である。前後半のつながり、1本の授業としての流れも考慮した方がいいと伝えてみた。授業づくりへの加わり方が分からない。</p> <p>・ 漆間先生の授業映像を見て感じたことは、細部にこだわり丁寧な授業をしているということである。何気ない指示でも「ここに注目しなさい、まだやらない」など、生徒の状況を把握しながら指示を出していた。また、図を提示し視覚的に気づかせていた。そして、生徒の発言に対してただ頷くのではなく、「どうしてそうなるのか？」など、さらに問返していた。発言を肯定することはたしかに大切だが、問い返しをすることでより深く考えられ、そこから新たな発見に繋がると思った。さらに「同じ意見の人はいるか」と聞いていた点も良い点だと思った。その他にも空白禁止の原則を守っているなど、何気ない細部にまでこだわっているように感じた。そのため、授業に途切れがなくあつという間の20分に感じた*。</p> <p>・ 今回は漆間先生の授業を拝見してどのような工夫や意図があるのかを考えた。1 番印象に残ったのは「実際に授業を通して行うことで不都合が分かる」という部分である。その場の勢いで授業を行うのではなく、綿密に計画を立て、リハーサルを行ったうえで十分に検討したうえで授業に臨むという心構えは大切であると改めて感じた。また漆間先生の行動(学校のスケールを動かす、工場を40見つけるなど)にはもっと他の良い方法があると他の先生から指摘されていたが、理に適った方法よりも生徒の驚きやインパクトを優先したという譲れない意図を持った上で工夫をしていたのはとても勉強になった。また幼稚園児にも分かるように理由を説明してほしいという発問は生徒がしっかりと内容を理解し考察しておかないと噛み砕いて説明出来ないため生徒の考えを深めるためには面白い方法だと思った。授業をストップモーションで見ること自体初めてだったが、授業者の行為や発言にはそれぞれ意図や思いなど理由が込められていると改めて感じた。全ての言動に理由付けは難しいかもしれないが、授業をする上で「なんとなく」といった曖昧な言動は少なくしなければならないと思う。</p> <p>・ 今回の授業では、ストップモーションの授業の映像を鑑賞しました。私が見たことない、子供を引きつける言葉や仕草、道具や話し方などがたくさんで、おもしろいなあと、あつという間だなあと思いました。また、(漆間先生が、筆者補足) 参加者から様々な質問やあるいは、これはこうだったけど、こうしたらどうなのか、というような提案にも、確かに仰るとおりだと思います、と素直に受け止めており、大学の先生や中学校などの先生が仰っていた、「素直に学べ」というのはこのことか、と思いました**。</p>
飛び込み授業⑬ 7 / 11 木	<p>⑫ 7 / 4 木</p> <p>・ ストップモーション方式による漆間先生の授業分析映像視聴②</p> <p>・ 教師の5者-教師の役割-</p> <p>※教師は、授業をするだけではなく、様々な役割があることをわからせた上で、授業の中でも学級経営をして行くことに気づかせたい。</p> <p>・ 班別教材研究④</p>	<p>(TAで支援に入った院生の声)</p> <p>すぐに模擬に移れそうな班が1つ、データの裏どりが未だできていない班が1つ。ここにきて、略案レベルでも構わないので、指導案は作るべきではないかと思始めている。指導案は作らなくてもいいということが、逆に授業づくりの壁を生んでいるのかもしれない。</p> <p>・ 「工場は臨海部にある」という大前提をイメージできない子どももいるかもしれない山間部から探した子が不利であるという意見に対して間接性の原理が利用できると思った。工場が「海沿い」や「川沿い」に立地しているということは子どもたち自身に気付かせたい内容だから指示や発問の中に含んではいけない。だから早く40見つけた子どもに対して「どの辺に多かったの？」のように問いかけることでなかなか見つからない子が真似をして探すようになる。このように「これだけは子どもに発見してほしい」というものは教師が提供してはいけないと改めて感じた。また「教師は5者であれ」という言葉も印象に残った。ただ勉強を教えることが教師の仕事ではなく様々な立場から子どもと関わるのが求められているのだと考えた*。</p> <p>・ 今回の漆間先生の授業の映像を見て感じたことは、子供の目線から授業を作ること大切だけど、それはとても難しいことだと分かった。私たち大人には物事を考えるときに意図せず自分の経験を踏まえて考える癖がついている。子供の目線で考えるということは、子供がまだ経験していない、わからないということを前提に想像する必要がある。しかし経験を身に付けている限りそれは非常に難しいことだと思った。授業を作るときには、隅々まで想像力を働かせて、できる限り子供の目線に立つということが大切なのではないかと考えた。</p>
飛び込み授業⑬ 7 / 11 木		(後掲「3 飛び込み授業の概要—3班を中心に—」参照)
飛び込み授業の振り返り	<p>⑭ 7 / 18 木</p> <p>・ ストップモーション方式による飛び込み授業の振り返り</p>	<p>(TAで支援に入った院生の声)</p> <p>ストップモーション方式を用いて、飛び込み授業の分析と反省を行った。ストップをかける側にも、力量が求められるためか、学生からの「ストップ」はあまり聞かれなかった。学生主体の振り返りの時間とは言い難かった。オープンキャンパスは定期試験の直後。3年生は授業数が多く、飛び込み授業を練り直す時間と精神的な余裕がなさそう。第10回あたりで飛び込み授業ができると、授業の振り返りも含め、質が高まるのではないかもと思う。</p>

段階	実施日	授業内容と感想に対する講義の意図	学生の感想から見た授業の状況（ゴシックは筆者）
飛び込み授業の振り返り	⑭ 7 / 18 木	<ul style="list-style-type: none"> ・ストップモーション方式による飛び込み授業の振り返り①（1組） 	<p>学生の感想から見た授業の状況（ゴシックは筆者）</p> <ul style="list-style-type: none"> ・今回の講義では、飛び込み授業をストップ・モーションで観察していきました。1組は私の担当するクラスだったので授業を見るのはこれで2回目でした。それによって新たに課題として見つけた（ママ）のが指示の仕方と生徒の意見への反応の仕方だと思いました。指示が伝わっていないと感じた時は、もう一度繰り返し指示をし直すこと、生徒の意見に対して「なるほど」とだけ返すのではなく「みんなは〇〇の意見についてどう思う？」や「（発表してくれて）ありがとう」といった声掛けが必要だと思いました。 ・今回の講義では、ストップモーションを用いて授業を添削した。やはり、自分の中では納得していたものでも見方を変えれば、異なる考えも出てくるということを知った。色々な視点からの意見を参考にしながらこれからの授業づくりに生かしていきたい。
	⑮ 7 / 25 木	<ul style="list-style-type: none"> ・ストップモーション方式による飛び込み授業の振り返り②（1組、2組） 	<ul style="list-style-type: none"> ・授業を振り返っていったが、グループ活動での様子や説明をしているときの集中の度合いなど授業の最中では気が付かなかった反応などを改めて確認することができた。見ていくと気づいてほしそうにしていたり、説明がうまく伝わってなく困っている生徒がいた。こうやって分析していくことで、どのような言葉かけが生徒を引き付けることができるのか、あるいは混乱させてしまったらうなど反省していくことができそうだ。 ・バーチャルウォーターの説明は、ものを私たちが受け取るまでに使われた水の量であり、例えば野菜であれば育てて、収穫して、お店に並んで私たちが買うまでにどのくらい水を使ったか、というように表すかなと思います。 <p>子どもの頃、先生が答えをいうまで焦らして、「ええ、なにに」「なんだらう」と周りの子が喜んで食いついていたのを思い出して、やっぱり答えを出すのは最後の最後というようにやったほうが興味が持続しやすいと思いました。</p> <p>授業にはメリハリをつけて、子どもの意見をしっかり取り入れるところと、それなりに流すところがあったほうが、力を入れるべきところに力を入れる（ママ）のかなと思います。授業全部が話し合いだったり意見を求めたりすると、授業者も子どももどちらも疲れてしまいそうです。ずっと手を挙げて僕が僕がというようにがつついてくる子どもをしっかりと活躍させてあげるのは教師の大事な仕事だと感じました。場合によってはと思いますが、最後の最後に真打登場と言わんばかりに当ててあげたら、その子も喜ぶのかなと思います。授業は知識を得るばかりの場ではなく、様々な意味の感動との出会いの場であるのだなと思いました。</p>
	⑯ 8 / 1 木	<ul style="list-style-type: none"> ・ストップモーション方式による飛び込み授業の振り返り③（3組） ・オープンキャンパスの授業の話合い 	<ul style="list-style-type: none"> ・自分たち3班の授業をみだが、授業者のカラーによって発問や、生徒への接し方などは変わらないと思った。また、小学校と違い、先生は役者にあまりならなくても、授業は成立するのではないかと考えた。たしかに声の抑揚や、表情など自由自在に変わるとは素晴らしいことだが、生徒も半分大人のような存在なので、小学生を相手にするのと同じ演技の仕方では成立しないと考えた。まだ、現場に出たことも実習に行ったこともないため、生徒からの反応の予想がしにくい。よって、先輩の先生などに伺うことも大事だと考えた。オープンスクールでは、頑張って授業発表をしてほしい。

段階	実施日	授業内容と感想に対する講義の意図	学生の感想から見た授業の状況（ゴシックは筆者）
飛び込み授業の学びの適用・応用	8/7水 高校生を対象としたオープンキャンパスでの授業	<p>・オープンキャンパスでは飛び込み授業を改良し高校生向けの授業作りを行った。少ない時間内でどのように授業を行うかを考えた。その結果、中学生から出た意見を高校生に吟味してもらおうという方針になった。そのツールとしてダイヤモンドランキングを実践した。</p> <p>本来であれば高校生に高校生の視点から意見を求めたかったが、導入の時間が短いため深く考えることは困難だと判断してこのような形をとった。本番ではやはり時間が足りず、最後は駆け足で行っても大幅に時間超過した。実際の授業と違うとは言え、いかに短くまとめ考えさせる部分は深く考えさせるかという部分が非常に大切だと感じた。2回目の授業では冒頭の部分を大幅に変え、考える時間を多く設けることはできた。しかし、それでも足りないくらいであった。</p> <p>ダイヤモンドランキングは実践したことがない高校生にとっては新鮮に感じられたかもしれないが、果たしてこの手法が本当に良かったのかという点は吟味をする必要があると思う。簡単に実践できるため、授業者側には「やった感」という錯覚が生まれてしまう。しかし本当に意味がある作業なのかをもう一度考えなければならない。ただこの短期間ではこのアイデアしかでてこなかったのが現状であり、それが今の私たちの実力だと思う。</p> <p>まだまだ引き出しの数が少なく、また引き出しがあってもそれをどこに活用するのかという整理ができていないように感じる。先輩方のアドバイスや先生方の講義を参考にしながら、また論文を読みながらこのまだまだな部分を地道に改善していきたい。</p> <p>・そして今回のオープンキャンパスでは中学生向けに作成した模擬授業を高校生向けに改善した。そこで飛び込み授業をさらに発展させた形の授業にすることになった。飛び込み授業の中で提案された対策をダイヤモンドランキングを用いて現実性などを考慮しながら検討することを授業の中心に取り入れることにした。これは飛び込み授業で中学生を対象として行いたかった内容でもある。前提となるうどん排水の背景を説明した後に中学生から出てきたうどん屋における排水の対策に優先順位を理由付けを含めて検討させた。今回のオープンキャンパスは社会科研究室がどのようなことを行っているのかを見に来ている。そこで授業構成の中心として取り上げたESDをどのように組み込んだのか、そしてどのような授業を構成するのかを短い時間ではあるが伝えたいという考えで模擬授業を構成した。オープンキャンパス用に構成する際に議論になったのはこの授業で何を伝えれば良いのかということであった。40分の授業のどの部分を省略したり、補足したりする場所を特に検討した。人によって何を重要視して授業を構成するのかによって少しずつ授業に変化が加えられていった。</p> <p>今回高校生向けに授業を検討したがあまりに短期間だったため満足な検討が出来なかった。しかしその中でも協働してよりよい授業を他の学生と検討することでよりよい授業を構成しようとした。他と意見を共有することで自分の視点とは違った目線で同じ授業を再構成する過程も重要であると感じた。</p> <p>・初対面の高校生同士だと話し合いがしにくいかなと思っていたが、間に大学生が入ったり、アイスブレイクの時間を多く設けることで話し合いが結構熱の入ったものになったと思った。高校生も「授業は楽しかった」という肯定的な意見をもってくれた。</p> <p>だが、高校生らしい深みのある授業ができたかという点必ずしもそうではない。今回はダイヤモンドランキングという多くの高校生にとって新鮮な体験があったため、いかにも政策の吟味ができたようになっていたが、実際は附属坂出中学校での飛び込み授業に少し付け足しをしたくらいの内容だったと思う。</p> <p>授業に深みを持たせるためには、子どもに0から1を生み出す体験を経験させることが肝になるかなと思った。今回は事前に中学生から出た意見を使用したため、政策については実現可能かどうかくらいの尺度を持たせることが限界だった。しかし、もっとたくさん時間を使い、世界中の排水処理の対策について学んだり予備知識を増やしたうえで、自分なりの政策を考えることが、本当に深みのある授業なのかなと思う。楽しかった、で終わるのではなく、真剣に考えることができたという体験をしてほしい。</p>	

3 飛び込み授業の概要－3班を中心に－

過去の飛び込み授業の経験から、班員が多いとフリーライダーが出ることを知っていた。経験知から班員は5名程度とし、今回は5名で6班編成にした。3クラスの授業なので、1クラス2班になる。講義の進行具合と附属との兼ね合いから、短縮期間の45分授業しか設定できず、交代時間を考えると1班20分と短い。班数を半減し1班45分とすれば、班員10人となり、フリーライダーが出る危険性が高い。飛び込み授業は、1班と3班は地域問

題でもあるうどんのゆで汁問題を、2班は仮想水を教材化した。紙面の都合で、3班（1年3組）中心に取り組みの概要を述べる。

1) 3班の飛び込み授業づくりの過程

受講生の学習活動記録から、3班の授業づくりの様子を見ていく。ゴシックは筆者。

○まずはじめに、私たちの班では、本講義の教科書（大学院生が開発したESD用地域副読本のこと、筆者補足）に掲載されていた「うどんの排水問題」をテ

ーマに授業づくりを行っていきたいというところからスタートした。そして前半の班と、後半の班でできればひとつの流れのまま授業を行うという希望のもと授業づくりを進めていった。

まず、うどんの排水、特にゆで汁がどれだけ汚いのかという事について調べた。その結果、生活排水の数倍汚いという事が明らかになった。そんなに汚れた水を、何の対策もせず排水していれば問題になるということもうなづけた。では、実際にそれに対してどのような対策を県、または国が実施しているのかということが気になったため、次はそれについて調べた。そうした結果、県や国は、水質汚濁防止法という法を施行したり、うどん店排水処理対策マニュアルを作成し、うどんの排水問題の解決に取り組んでいるという事が明らかになった。

ここで、ひとつ気になったことがある。もし、うどんの排水が産業排水や生活排水だとして、それらを排水したとしても、必ず下水道や浄化槽を通ってきれいになるはずである。それならどうしてこのようなうどんの排水問題が露見されたのかという問題である。この問題を解決するために水道局に電話でインタビューを行った。その結果、それは下水区域外の田舎の地域のうどん屋がそのまま垂れ流した事により問題になったのだということを知ることができた。ちなみに、うどんの排水は通常の浄化槽では、処理できないほどなのだそうだ。そして、実際のうどん屋の排水についてだが、大規模店のうどん排水は産業排水で、小規模店は生活排水という分類であることが明らかとなった。また、それぞれに汚染値の基準が設けられており、その基準を超えないように各店舗で工夫・対策をして、処理するようになっているということを知ることができた。そうした基準をくぐりぬけてはじめて、下水処理場で処理されるのだそうだ。自分たちが気になっていた問題に加え、大変詳しいところまで教えて下さった。

そこから、では、実際にうどん屋さんではどのような工夫、ならびに排水をしているのかという事が気になったため、「○○○」さんといううどん屋さん

ことや、金銭的な問題から、排水問題についての工夫は現段階では行えていないとのことだった。浄化槽なんかもつけられればいいけど、実際のところはそう簡単に買えるような値段ではなく、仕方なく生活排水と一緒に排水せざるをえない状況とのことであつた。非常に貴重な意見を伺うことができた。それに加え、○○○さんから、うどんのゆで汁もいただくことができた。

以上を踏まえ、うどんの排水問題をテーマに、それについての公的な対策と、私的な対策について学びを深めていき、もし自分がうどん屋さんの店主（既設店）だったらと仮定し、考えていくような授業にしていこうという大まかな見通しが立った。そして、そこからまとめの部分で、自分達の身の回りの水質汚染問題にも目を向け、自分達のためにも、将来のためにも、その解決に向けて、自分達にもできることを考えていってほしいという形で、ESD的な視点を提供するまとめにするという結論に至った。そしてその後、数度の模擬授業や、授業検討で細かいところを修正し、飛び込み授業で行う授業を作成した。(T生)

○授業づくりをするのは今回が初めてであり、何から取り組めばよいのか全く分からなかった。最初は「泥クッキー」か「うどんのゆで汁」の2つの候補があつたが、身近な「うどんのゆで汁」を題材にしようということが決まった。そこからこの話題に関する情報集めが始まったが、インターネットで調べてみるとかなり昔の話題であり、なおかつ新聞のコラムに少し載っただけであり情報はあまりなかった。この時点で、情報が集まらないからなかなか進まないと嘆いていた。しかし、県に聞き取り調査を行おうということでMさんが県庁に電話をかけ、いくつかのデータを集めてきてくれた。そのデータは今回の授業ではあまり触れることができなかったが、何よりも実際にインタビューしに行くことの大切さを感じさせてくれた。そこから私はまず、大まかな授業の展開を考えた。①ゆで汁が汚い②県は対策をした③打ち粉の削減、ゆで方の工夫をうどん屋に協力依頼④うどん屋さんでも小さなことから問題解決を目指している⑤みんなにも身の回りで何かできる

ことはないかな、という流れを作成した。全く何の意見も出ずに授業づくりが停滞していた班に議論する種ができたため、この構成を改良して授業を作っていくようになった。構成の改良に関しては班員全員が集まり図書館などで行った。その際にはやはり4年生のTさん、Gさんのアドバイスは的確であった。私たち3年生の授業づくりではすべてがスムーズに流れている構成であったが、先輩方2人はそれに対して「こういう意見が出る可能性もある、そのまとめ方では小学生の授業だ」といった意見を出していただきその意見を参考にしながら改善していき授業の大筋が固まった。

大筋が固まると、そのためにはどんなデータや情報が必要なのか明確になりその情報集めに取り組んだ。まずは実際にうどん屋へ行こうということで、坂出市の〇〇〇〇製麺所に連絡を取ったが連絡が返ってきたのが授業の2日前であり今回は、大学近くのうどん屋にインタビューさせていただいた。うどんのゆで汁はどのように捨てているのか、新聞記事のような問題をご存知か、何か取り組んでいることはあるか、このようなことをインタビューした。インタビューには私とSさんとTくんで行った。答えは生活排水と同じように流している、汚染問題があることは知っておりでんぶんが原因だと思われる、店舗では特に取り組んでない、お金があれば設備を買えるけどなあ、といった内容であった。そしてゆで汁を頂いても良いかというお願いにも快諾していただいた。

ゆで汁を生活排水で流していると分かったことで、では下水処理場を通るはずなのになぜ汚染問題があるのか気になった。そこでそのあとすぐに高松市上下水道局に電話をし、電話でインタビューさせていただいた。返答としては、「うどん屋にはある基準を設けており、その基準を超えない汚染度で水を流してくださいとお願いしている。基準以下の場合は市で責任をもって処理している。このような問題が起きた理由は、おそらく田舎のうどん屋で起きたのだと思われる。上下水道の設備が整っておらず、水が店から垂れ流しになっていたためそのような問題が起きたのだろう」という内容であった。うどん屋と

水道局へのインタビューで私たちが行おうと思っていた授業の素材はそろった。

その後は、掲示物の準備やワークシートの準備を行い模擬授業を行った。模擬授業を行うことで新たな問題もいくつか表れその度に班員で話し合い改善した。他の班の人にも見てもらい、意見を出してもらった。模擬授業を行った上ではある程度の流れはできておりスムーズに授業を展開することができると感じていた。(T生)

うどんのゆで汁問題は、少し前に話題になっていた。当時に開発したESD地域副読本を参考にしたので、記載されたデータは古く、すぐさま活用できない。だが、うどん県を標榜する香川に住む者なら関心のある問題であり、学生は是非授業にしたいネタである。しかし、インターネット活用の調査では、「情報が集まらないからなかなか進まないと嘆いていた。」注1)に述べたように、これは筆者の願っていた状況である。「やはり動かないと駄目じゃない」と声がけし、この壁をどう打ち破るか見守っていた。これでは時間ばかり経ちどうにもならないと意を決し、「県庁に電話をかけ、いくつかのデータを集め」出した。動いて聞き取りをした体験は、「実際にインタビューしに行くことの大切さを感じさせ」た。こうなると、うどん屋や関係各所に調査に行く抵抗もなくなり、事が進む。他学部4年生や4年再履修生の助言もあり、最終的に、「自分達の身の回りの水質汚染問題にも目を向け、自分達のためにも、将来のためにも、その解決に向けて、自分達にもできることを考えていってほしいという形で、ESD的な視点を提供するまとめにする」という結論に至った。」。

2) 3班の飛び込み授業と授業後の反省

3班の1年3組指導案を以下に掲載する。

学習活動	生徒の反応	指導上の留意点
1. 香川県の有名なものや特産物について考える。 2. うどんのゆで汁の実物をみて、感じたことを述べる。 3. うどん屋の排水がどれほど汚れているか考える。	・うどん ・和三盆 ・オリーブ ・骨付き鳥 ・うちわ ・醤油 ・白く濁っている。 ・思っていたより汚い。 ・食べているものだし、そんなに汚くないよ。 ・問題になるほどだし汚いかも。 ・うどん屋の排水って生活排水よりもすごく汚れているだね。	・次にうどんのゆで汁を提示することを念頭に置きつつ、意見の出しやすい雰囲気を作る。 ・うどんのゆで汁の実物を提示し視覚的に分かりやすくする。 ・うどん店と他の業種とのCODの比較を示したグラフからクイズを行う。 ・資料内の排水基準についても簡単に説明しておく。
香川県のうどん屋さんの抱える水問題について考えよう。		
4. うどん排水をそのまま流してもよいのかどうかを考える。 5. うどん排水問題の対策（特に法律やマニュアル）を学ぶ。 6. もし自分たちが法的に規制されないうどん屋の店主になったと仮定して対策を考え、発表する。 7. まとめ	・新聞に載ったぐらいだからそのまま流していると思う。 ・環境に悪いからそのままは流してないよ。 ・うどんの排水マニュアルがどのようなものなのか分かったよ。 ・うどん屋も細かいグループ分けがあるんだ。 ・既設店では、努力義務だけなんだ。 ・県から補助金をもらう。 ・うどんのゆで方を工夫する ・店舗で協力して、浄化槽を購入する。 ・ゆでなくてすむうどんの開発をする。 ・これを機会に、身の回りの問題についても目をむけて、自分たちや将来のために、対策を考えてみよう。	・実際にうどん排水が問題になっている証拠として、実際の新聞記事を提示する。 ・次につなげるため、既設店は、努力義務ですんでいることに着目させる。 ・個人、ペア、班の順に考えさせる。 ・行き詰った際のヒントとして、実際のインタビューの劇を演じる。 ・対策のヒントとして県がうどん屋に行ったアンケートを提示する。 ・班からの意見を要約して板書する。 ・自分の班になかった意見はワークシートに写させる。 ・身近なものにも問題があるということを認識させる。

3班の飛び込み授業づくりの様子と授業後の反省に関わる受講生の感想を紹介する。ゴシックは筆者。

○（前略）

次に私が担当した後半部分では、ワークシートへの記入に関してだと思う。生徒のワークシートを集めて、全てを見たが、空欄が非常に多かった。最初に述べたように、意見を交流することに積極的であり、ワークシートに書くより話すことを優先していた為、ワークシートに書くようしていなかった。また、飛び込み授業という事で、今後の為に記録しておこうという気持ちもあったかもしれない。また、ワークシートに書いてもらった感想の多くが「劇が面白かった」であった。これは、仕方のないことかも知れないが、社会科の授業というより、「大学生が来て楽しい授業をしてくれた」と感じているのだろうと思う。しかし、私たちはESDについての授業を今まで作ってきて、中学生のために準備してきた。そこ

をクラスの生徒全員にしっかり伝えることが重要であった。授業の最後に、まとめが早く終わってしまった、時間が余った時に、「身近な水問題って何があるだろう」などと聞いてみても良かったと感じる。（S生）

○授業本番では思っていたほど緊張せずに授業に入ることができた。頭の中で授業の流れは何度もシミュレーションしておりその通りに授業に入ることができた。生徒も活発な子が多く反応がしっかりとあったためその点は非常に助かった。意見を求めると手を挙げずに口々に発言するほど元気であったため、挙手しての発言を求めるように意識した。うどんのゆで汁を見せるシーンでは、正直もう少し食いついてくるかと思った。グラフを提示したシーンも同様にもう少し驚きが出てくる予定であった。この点に関しては完全にこちら側のミスであった。このことについては後でまとめる。

話し合いのシーンでは黙り込んでいる班はなかったが、こちらが活用してほしい情報にあまり触れて

いなかったりワークシートにあまり記入していなかったりなど想定外のこともいくつかあった。うどん屋へのインタビューを劇形式で行ったが、生徒はすごく食いついており関心を惹きつけることは確実にできた。しかし肝心の伝えたいポイントが伝わっていない生徒も多くおり、ただ楽しんでいるだけの生徒も多くいたように思う。

（中略）

授業の流れであるが、課題提示のタイミングやデータ提示のタイミングに失敗したと感じた。学習課題を早い段階から提示してしまい、生徒に授業内容を想像させてしまい、驚きを半減させてしまったように思う。提示するタイミングを変えるだけで、生徒は予想外のことを多く授業の中で経験することができたはずである。仮に授業内容が素晴らしかったとしても、発問や課題提示のタイミングが変わるだけで台無しになる。小さいことのように思うが非常に重要なことだと感じた。まさに神は細部に宿ると痛感した。

全体的に振り返ると、初めての授業づくり・授業実践ということもあり計画を大切にすぎた。私たちが作った計画に何とか当てはめようと生徒に無理をさせてしまった部分が少しあったと反省している。指導案があくまで「プラン」であるように生徒を教師の計画に当てはめてはいけない。臨機応変に対応できる柔軟さを身につけなければいけないと思った。（T生）

早々と学習課題を示した飛び込み授業では、うどんのゆで汁の予想外の汚さを驚きをもって捉えさせられなかった。「授業内容が素晴らしかったとしても、発問や課題提示のタイミングが変わるだけで台無しになる。小さいことのように思うが非常に重要なことだと感じ」、第6時の「神は細部に宿る」を痛感している。また、「『大学生が来て楽しい授業をしてくれた』と感じているだろう」が、「ESDについての授業を今まで作ってきて、中学生のために準備してきた」のに、「生徒全員にしっかり伝えることが重要であった」と、ESDの本質を伝え切れなかったことを反省し

ている。

3) 他班の飛び込み授業前後の様子

うどんのゆで汁問題を扱う1班は、香川県庁職員の立場でうどんの排水対策を考えさせた。授業時間が短く、出て来た対策の現実性等を考慮した検討が出来なかった。そこで、オープンキャンパスでは、これを授業化した。

一人の女子がうどんの排水問題の多くの情報をメディアから得ており、「子どもはこちらが思っている以上に多くのことを知っている。そのことは特にスマホなど多くの情報を得ることのできるメディアをすでに使いこなしている子どもが増えたことが原因となっているだろう。つまり、授業者がネットでちょいちょいと調べた程度のことは子どもにとっては新鮮な知識とならないといえるのだと感じた。（S生）」。それだけに、「教材研究のために専門家の方に話を聞き、資料を頂く、という経験は今までしたことがなかった。これから社会科を教えていく際にはこのように専門家の方に話を聞くという機会は非常に多くなると思うので、よい経験となった（H生）」。

バーチャルウォーターを扱う2班は、カレー一杯に使われる水量から日本の水輸入に気づかせ、水政策を考えさせた。バーチャルウォーターの説明に苦慮し、この言葉は使わず、カレーのことから間接的な水輸入を説明することにした。また、「水を大切にしよう」という道徳的終わり方でなく、社会的まとめにする苦心をした。結局、モラル的な話の節水対策では全員は守れそうもないので、節水政策を考えるという流れにした。対策から政策に繋げる際、授業者は、「皆こうやって対策考えても守れないよね？」と投げかけ、政策を考えるよう促した。反省では、授業中の「無理無理」という子どものつぶやきから「なぜ無理と思う？」と投げかけ、節水政策を考える活動へと繋げればよかったという声が聞かれた。

4 終わりに

表2に、受講生全員のレポートからESDに係わる箇所を抽出し、カテゴリー別にまとめた。従来の教育とESDとの違いは、未だ見ぬ将来世代も考慮して問題を考えるか否かであり、①～⑪はそれに係わる。ESDは、「文化の多様性が普遍性か、環境保存か開発か、効率か公正か等の価値観葛藤問題や空間的利害対立や世代間利害対立を、当事者性の高い意思決定をすることが問われ」（伊藤2016）、⑫～⑲はそれに係わる。ESDが「社会・文化、

環境、経済」の3視点での考察が大切と言われることに、⑫～⑲は係わる。多面的・多角的な考察と係わる⑳～㉑に先の3視点や将来世代の立場が入っているかは不明であるが、ESDを進めるには、多面的・多角的考察は欠かせない。㉒の協働的に取り組む資質・能力は、ESDで必要な能力である。当初、ESDって何という状態の受講生が、全員なんらかのESDに係わることを書いている。ESD理解はそれなりに深まったと言えよう。

表2 授業後のレポートに見られるESDに係わるキーワードの使用と認識

① 今この場に生きる自分たちのことだけでない。	⑪ 多角的な視点を持ってより現実的な対策案を考察する。
② 次代のために解決に向かう授業である。	⑫ 様々な人の立場で考える
③ 今までいない未来の人たちのために、いま私たちは何をしなければいけないのか、何を必要があるのかについて考えられることも育成する。	⑬ 環境問題はある一つの視点だけでなく様々な機関が認識、協力することで解決に進んでいくことを認識させようとした。
④ 自分たちの世代というより次の世代の人が過ごしやすい環境にする為に今から何が出来るかを考えるもの。	⑭ 知識の伝達にとどまることなく、体験することを通して問題の背景を理解し、多面的、多角的なものの見方から思考力を養う。
⑤ 将来的に問題が多少なりとも解決に向かう、そして自らの周りでも意識することで小さな事ながらもそれが将来の人々にとって有益な行動になっているのではと気づく。	⑮ 水質汚染の問題について考えることで、実際に問題解決に向けて取り組むわけではないが、当事者意識をもって問題解決に取り組むことができた、またはその姿勢を養うことにつながったのではないかと。
⑥ ESDは自分たちの未来について考える授業	⑯ 当事者意識をもってそうした問題解決に協働的に取り組む姿勢は、ESDの考え方において非常に重要な要素のひとつである。
⑦ ESDは未来志向という特徴がある。	⑰ 他所の問題を自分のことのように考え、問題に真摯に向き合う。
⑧ これから先、ずっと、みんながあんしんして、笑顔でくらせるせいかいにするために、いまなにをしたらいいか考え、行動するための教育。	⑱ 生徒に他人事ではなく自分たちが当事者であるという自覚をもたせる。
⑨ 現代社会の諸課題を次の世代の人のことまで考え身近なところから解決に向けて取り組んでいくということ。	⑲ 生徒が自分のこととして考えられる。
⑩ これから先の世代にも影響を及ぼすことになるので今の世代の子どもたちから身近な問題として考えさせる。	⑳ 意外なところに問題が潜んでおり、それに対して自らできることを考えて行動していこうというもの。
⑪ 住みよい環境を未来に繋げる。	㉑ 地球規模の問題となれば、規模が大きすぎて自分一人ではどうしようもないと感じられるかもしれないが、実はそうではなく一人ひとりの意識・力が問題解決のための一助となることを理解し、万人が当事者意識をもって課題解決に取り組むことの重要性を改めて感じさせられた。
⑫ 様々な分野からなる課題を「持続可能な社会構築」の観点から繋げ、総合的に取り組む。	㉒ 地球に存在する人間を含めた命ある生物が、遠い未来までその営みを続けていくために、自らの問題として捉え、一人ひとりが自分にできることを考え、実践していくことを身につける。
⑬ ESDは環境、経済、社会の統合的な発展が中心的な考えである。	㉓ 自分たちの生活に関連つけた授業である。
⑭ 環境問題ばかりに目をむけるのではなく、経済や社会そして環境の統合的な発展をめざすのがESDの基本的な考え方である。	
⑮ 環境学習に属し、国際理解学習の一面がある。	
⑯ 環境学習、その他関連する学習である。	
⑰ 課題解決に向けて協働的に取り組む資質・能力が求められる。	

本小論の骨子は、日本ESD学会第2回大会（2019.8.19、宮城教育大学）にて発表した。

注

1) 大学院生のESD用地域副読本開発の詳細

は、伊藤・白山（2013）参照。筆者は、受講生に動いて情報収集する経験をさせたくて、「面白い教材で、未だ先輩も授業してないからやったら」と言って、初期のESD用地域副読本（香川大学教育学

研究科教科教育専攻社会科専修（2007）
『水のパイオニア－香川・日本・世界－』
にあるうどんのゆで汁問題の授業化を勧め
めた。これは、すぐ魅力的なネタと分か
るが、データが古く、そのまま活用は無
理であり、動いて情報収集する必要があ
った。

文献

- 伊藤裕康・白山淳史（2013）「大学院におけ
る地理教育のための教員養成の在り方－
ESD用地域副読本の開発を通して－」地
理教育研究12、9-16
- 伊藤裕康（2016）「水問題を基軸とした持続
可能な社会形成のための社会科学習」教
材学研究第27巻、87－98